

古代阿波の忌部氏が、今の安房の地に上陸し、粟、麻、木綿の栽培法を教えたので、粟に基いて阿波にちなみ「安房」の名が起り、麻のよくそだつ国を「総」の国といつた。後に都に近い所を上つ総、遠いのを下つ総といつた。こうして安房、上総、下総の三国が定つたのである。

大化改新以後それぞれの国には、国司の役所が置かれ、その所在地として、安房国国府村、上総国市原郡市原村、下総国市川市国府台がえらばれた、蝦夷経営の要地として、軍団が設けられ、駅の制度も整つていた。そして、奈良時代にはこの三国にそれぞれ国分寺が建立されて、地方文化の中心となつたようである。

平安時代には地方政治が紊乱して、天慶年間平将門の乱が起り、ついで平忠常の叛乱等もあつたが、源頼朝が鎌倉に幕府を開くに先立つて、千葉常胤、上総広常の功があつたので房総の所領を取めた。

後北条、吉野の両時代を経て、室町、戦国時代となり、中央政權の争奪戦や関東管領の対立抗争の中に巻きこまれたので、房総の地は四分五裂して、人民は大いに苦んだのであつた。

やがて、豊臣秀吉が天下を統一し、関東の地を家康に与え、次いで家康江戸に幕府を開くや、房総の地はお膝下として重要であるため、或は直領を置き、或は佐倉藩をはじめ譜代の小藩を分立せしめて、大同団結を禁じた。初期には9藩、幕末には16藩、明治初年には24藩であつた。

王政復古の大業成るや、上総安房県と下房県とがおかれ、2年には葛飾県と宮谷県とが新設され、同年6月藩籍奉還によつて、旧藩主は藩知事となり、4年7月廃藩置県によつて県となつたもの、安房では館山県ほか3県、上総は大多喜県ほか10県、下総は佐倉県ほか6県、更に同年11月改めて上総、安房両国を合して木更津県を、下総国に印旛県をおき、6年6月木更津、印旛の両県を廃して、千葉県となし、県庁を千葉町においた。8年5月新治県所管の香取、匝瑳、海上の3郡が千葉県の管地となり、7月には葛飾郡の一部を埼玉県と東京府に香取郡の一部を茨城県に割いて、江戸川、利根川を境界とする現在の千葉県の境域が決定した。